

銅賞

身近にある「いじめ」という犯罪

横須賀市立神明中学校三年

深澤常斗

「いじめ」なんて僕には関係ないと思っていました。だって、僕はそんな個性的なところもないし、いつも人の陰に隠れていて、目立ったことをしなかったから、いじめの標的にされることはない。

そして、小学校低学年の時に読んだ漫画で、（友達がいじめられていたのに、自分もいじめの標的にされるのが怖くて何も友達のためにしてあげることができなかった主人公）の姿があり、こんな風にはなりたくないと思う、友達が大変な目にあっていたら、絶対助けようと小さい子ながらに決心しました。

小学校高学年のある時、僕ではなく、僕の親友がいじめにあつたのです。そのいじめは嫌がらせや暴力ではなく、無視、陰口の大人数によるいじめでした。

ある日、いじめの主犯格が僕に「あいつどう思う、きもくね」と聞いてきたのです。僕は小学校低学年の時に読んだ主人公と同じような行動に出してしまい、「まあ、そうかな」と言ってしまったのです。

主犯格はそうかというふうには、その場を離れていきました。僕の心

臓はバクバクでした。親友を見ると、親友も僕のことを見ていて、目があいました。放課後、電話でそのことを謝ると、「しょうがないよ、僕でもそうしてたから」と僕に笑いかけてくれました。

その夜、「自分は一番してはいけないことをしてしまった」と後悔し、(親友も毎日苦しいんだから、僕も強くならなきゃ)と小学校低学年以来もう一度決心しました。

次の日、親友に「おはよう」と「じゃあね」をいいました。その日はそれだけでしたが、毎日徐々に会話数は増えていきました。周りからは驚きの目で見られましたが、それから少し経つと、今までいじめの標的になるのが怖かったばかりに助けることができなかつたけど、少しだけ話しかけてみようという人たちが増え始め、人数でのいじめはなくなりました。

この体験を通して僕は、いじめを受けている人の立場に立ち、今相手に何を一番してあげられるかを考えるようになりました。

ある本にこう書いてありました。「いじめはいじめを受けている人がいじめだと思ったら、いじめです。」こうも書いてありました。「いじめをみているだけでもいじめです。」

しかし、いじめは「犯罪」なのです。

だから、たくさんの、いじりだと思っ嫌がらせをやっていた人も、それを見過ごしていた人も知らないうちに「いじめ」という犯罪を犯しているのです。

いじめをし続け、いじめを受けた人が不登校や自殺をしてしまったから、「こんなつもりじゃなかったし、こうなると思わなかった」と思っても手遅れなのです。

なので、グループで、ある子にいじめをしているのが分かったら、すぐにその子に声をかけてあげてください。その少しの勇気で状況は少しずつ少しずつ変わっていくのです。

そして、いじめの予防に一番大切だと思うのは、仲間同士、自分の素直な気持ちを言い合える関係を築いていくことだと思います。それをクリアすることで、いじめがなくなり、笑顔があふれる世界になると、僕は思います。